

項目	本年度の重点目標と目標達成のための手段	結果の考察・分析及び改善策等(○成果・●課題・☆改善策)	自己評価	関係者評価	学校関係者評価のコメント
<b>体育・食育</b>	重点目標：基礎体力、食育推進及び望ましい健康生活習慣の定着 <b>■手段</b> 1 基礎体力及び運動能力の向上 2 保健指導の充実・病気の予防と治療率向上 3 家庭と連携した基本的な生活習慣の定着及び食育の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 県「体力づくり優良校」に2年連続認定され、表彰されるなど体力が向上してきた。</li> <li>● 本年度の体力テストの結果から、ボール投げで全学年伸びたものの、昨年度よりTスコア50以上の種目は減少した。持久力、柔軟性、瞬発力が課題である。</li> <li>○ 三松サーキットによる準備運動や基礎体力向上を図る運動を行っている。取り組んでいる教師(90%) (12月実施)であった。</li> <li>● 歯の治療率は68.8%に留まっており、健康教育の推進と保護者への啓発が必要である。</li> <li>● 生活のリズムの乱れから、休日明けや週始めに欠席や体調不良を訴える児童がいる。</li> <li>○ 養護教諭と連携した授業の実施(83%) (1月実施) 今後も計画的に実施していく。</li> <li>● 昨年度の残食率は、年平均2.8%と市平均(1.8%)より多く、偏食傾向がみられる。食に関する指導を計画的に実践する必要がある。</li> <li>○ 望ましい食習慣の確立のために、食事マナーや正しい箸の持ち方指導、栄養教諭等と連携した食育授業、給食指導を行っている。</li> <li>○ 食事のマナー(正しい箸の持ち方等)についての保護者評価が昨年度より上昇している。</li> <li>○ 食事マナーや正しい箸の持ち方指導を行ったという教師(71%) (1月実施)</li> </ul>	3. 0	3. 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 2年連続での「県体力づくり優良校」の認定、誠にありがとうございます。体育専科の先生による授業公開や、他学年への情報提供など、先進的な取り組みが大きな成果を上げています。「三松サーキット」などの工夫により、子どもたちが楽しみながら自然に体を動かす環境が整っており、基礎体力の向上が数値としても表れてくることを次年度も大いに期待しております。</li> <li>○ 運動習慣のある子とない子の二極化が進む中、集団でのゲームや多様な運動経験を 제공하는ことは極めて重要です。特にコロナ禍を経て、外遊びや体を使った交流が不足しがちな現代の子どもたちにとって、学校での体育は「耐力」や「対人間関係力」を養う貴重な場となります。運動が苦手な子ども「体を動かす楽しさ」を味わえるような、一人一人の実態に即した経験の提供をお願いします。</li> <li>○ インフルエンザ流行期などの困難な時期でも、残食率の改善に真摯に取り組まれている姿に敬意を表します。栄養教諭と連携した指導により、家庭でおかわりをしない子が給食ではおかわりをするなど、食への関心も高まっているようです。バランスの取れた給食を完食することの意義を伝え続け、子どもたちの健やかな成長を支える「食」の基盤作りを、今後も継続していただきたいです。</li> <li>○ 箸の持ち方や「いただきます」の言葉に込められた「命をいただく」という意味を教えることは、一生の財産となります。家庭での指導が多様化する中で、学校が箸の握り方などの基本を丁寧に指導されている苦勞は察するに余りあります。例えば「箸の持ち方コンクール」のような、子どもたちが楽しみながらマナーを習得できる仕掛け作りも検討し、食事を大切にす心の育成を期待します。</li> <li>○ おし歯治療の停滞や治療率の低さは、保護者の多忙さも背景にあり、喫緊の課題となっています。むし歯は放置して治るものではなく、全身の健康に影響する病気であるという認識を広める必要があります。保健だより等を通じた養護教諭による発信を継続し、学校・家庭・地域が一体となって「早期治療」から「親子での予防意識」への転換を図る教育活動を推進してください。</li> </ul>
<b>特別支援教育</b>	重点目標：特別支援教育の充実 <b>■手段</b> 1 学校全体で取り組む支援体制「全ての教職員が取り組む特別支援教育」 2 特別支援学級児童に係る交流学級と協同した支援 3 就学指導の計画的実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 特別な支援を必要とする児童が年々増加している。通常の学級在籍で、学習面以外でも生活面、対人関係面において個別の支援を要する児童が多い。</li> <li>○ 「三松小特別支援教育手引き」を基に、支援レベルを4段階に分けて、児童の状況を把握し組織的な体制がとれるようにしている。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・レベル1(通常学級での工夫)</li> <li>・レベル2(学年チームによる支援)</li> <li>・レベル3(学校全体による支援)</li> <li>・レベル4(関係機関との連携)</li> </ul> </li> <li>○ 校内支援体制の整備を特別支援教育コーディネーターが相談窓口となり進めている。また、関係機関(教育と福祉の連携)、エリアCOやエリアメンター、チーフCOからの助言も有効活用している。</li> <li>● 特別支援に起因する学校不適応や問題行動が増加傾向にあり、職員の特別支援教育に係る理解促進や対応力等の向上を図る必要がある。</li> <li>● 特別支援教育の専門的な知識や経験をもつ核となる人材の育成が必要である。</li> </ul>	3. 2	3. 7	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「すべての教職員が取り組む特別支援教育」を掲げ、全校体制で取り組まれている姿勢は非常に心強いです。児童の状況に応じた4段階の支援レベル設定など、先生方の負担は大きいかと存じますが、組織的な対応こそが支援の質を高める鍵となります。一人一人の特性を理解し、きめ細かく対応される先生方の努力に感謝するとともに、今後もその専門性を高める学びを継続してほしいと願います。</li> <li>○ 支援の「見える化」を目指した手引きの実践は、教職員間での共通理解を深める上で大変有意義な取り組みです。特別な支援が必要な児童が増加傾向にある中、経験の浅い先生でも適切な対応ができるよう、こうしたガイドラインの活用は不可欠です。専門的な知識を持つ核となる人材の育成と並行して、全職員が同じ方向を向いて子どもたちを支える体制をさらに強固にしていってください。</li> <li>○ 「なぜあの人だけ特別なの?」という児童の素朴な疑問に対し、「目的の違い」を明確に伝え、「ルールは必要に応じて調整されるもの」という考え方を育てる姿勢は大変重要です。これは多様性を尊重する社会の縮図でもあります。画一的な「公平」ではなく、一人一人が最大限に力を発揮できる「合理的配慮」の考え方を、子どもたちや保護者にも浸透させていくことを期待します。</li> <li>○ 学校内だけで課題を抱え込まず、子ども課や社会福祉協議会、民間施設など、外部組織と連携した支援体制の構築が進んでいることを評価します。複雑化する家庭環境や児童の課題に対し、多面的なアプローチが重要な時代です。今後もコーディネーターを中心に関係機関とのパイプを太くし、地域全体で子どもを見守り、育てるネットワークをより一層充実させていく必要があります。</li> <li>○ 特別支援学級の入級者が増える中で、個々の特性に応じた一対一の指導が効果を上げている点は素晴らしい成果です。通常学級においても、多様な子どもたちが共に学び、落ち着いて活動できるよう、教室環境の整備や指導法の工夫がなされています。先生方の熱意が子どもたちの安心感に直結していますので、今後も一人一人の「できる」を増やす温かなご指導をお願いいたします。</li> </ul>
次年度の方向性についての校長所見	学校経営ビジョンをもとに、知育・徳育・体育・食育・特別支援教育の調和のとれた児童の育成を目指し、職員が目的意識を明確にもちながら、実践を行った。学校の自己評価は各項目3.0以上となり、一定の成果が見られた。特に学力面では、向上が見られた。しかし、基本的なルールなど、守るべきことをしっかりとできない児童も見られた。来年度は、本年度以上に全職員で共通理解・共通実践を行い、特に生徒指導面と特別支援教育の面で今年度明らかになった課題の解決を目指したい。そのために、教育目標「学ぶ三松・鍛える三松・思いやりと誇りを持つ三松」の実現に向けて、新たなプランと具体的な取組事項を決め、地域や保護者の皆様と、「地域とともにある学校づくり」を推進していきたい。				